

目次

岷江入楚

一	桐壺	3
二	簫木	103
三	空蟬	205
四	夕顏	223
五	若紫	290
六	末摘花	341
七	紅葉賀	382
八	花宴	428
九	葵	452
十	賢木	514
十一	花散里	582

(外題)
岷江入楚

一 ナシ(九)
桐壺

それ光源氏物語はあまねく人のもてあそひ物として世につたはれることすてに百とせを六かへりはかりにも成ぬ。しかあれとそのかみは人の心かしこくみつからわきまへしれるによりてしめて註釈するにをよはす。彼伊行か一部の所々を積したるを京極黃門卷々に難義を勘加られて奥入と名つけし。これらをや濫觴とも申へナシ(九)からん。その後紫明水原等ナシ(高・九)を始として抄出そのかすありといへともあなかにこれをと用ることなくなれり。たゞ清閑寺のおとゝの河海抄桃花坊の禅閣の花鳥余情をもて尤此物語の要極とす。それにうちつゝき肖柏老人の聞書を弄花と名つけたるよりこれにふけるともから紙筆をついやせることあけてかそふへからすといへともちかくは逍遙禪府奥旨をつたへられしより称名三光の二院うけつきてみなその流をくますといふものなし。抑兵部侍郎源藤孝は壮年より文を左にし武を右にする志を専にしてつゝに丹陽府君

たるへき命をうけつゝしは／＼烹鮮の職にたへたりといへとも功成名遂て身退くことよりはるを忘れず俗塵を出つゝ幽齋に屏居せらる。されとその忠義をしたはるゝゆへに猶太閤相公の幕下を辞することをゆるされず。つねに錦城の歌吹海にましはりつゝ枕を支て夜雨の奇なることをいまたしらす。よりてもとよりの心さしをとけさるににたり。彼老人數嶋のみちをつたへて筑波の跡をたつぬるおもひふかきかゆへに此物語をもてあそふ心も又ねんころ也。しかるにあまたの抄出をたつさふるそふる(高)ことそのわつらひあれは古来の註釈を一覧のためにするしあつむへきくはたてありといへともつゝにそのいとまをうることなし。こゝによさの海にあまのしわざもなすことなくていたつらに月日をゝくる客あり。かの心さしの趣趣(九)をはたしとくへきよししきりにゆつり命せらるちる(高・九)。しかあれとおろかなる心まよひやすくてみしかき筆にあらはしかたからんことをかへりみるといへとも三光院内府講読のおり／＼むしろの末につらなりて耳にふれたるかたはしをかきつけつゝ残りともまれるをたゞにくたしはてんも念なきこゝちしつゝ余習なまし(高・九)にひかれてなましなまし(高・九)におろ／＼是を註す。閑なる窓にむかひても猶几のうへものうき睡にさまたげられて十年はかりに成